

なお深く主を知らんーエリシャとシュネムの女ー

2006. 12. 12 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ピリピ人への手紙 3章4節から11節

ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

列王記・第二 4章8節から17節

ある日、エリシャがシュネムを通りかかると、そこにひとりの裕福な女がいて、彼を食事に引き止めた。それからは、そこを通りかかるたびごとに、そこに寄って、食事をするようになった。女は夫に言った。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机といすと燭台とを置きましょう。あの方が私たちのところにおいでになるたびに、そこをお使いになれますから。」ある日、エリシャはそこに来て、その屋上の部屋にはいり、そこで横になった。彼は若い者ゲハジに言った。「ここのシュネムの女を呼びなさい。」彼が呼ぶと、彼女は彼の前に立った。エリシャはゲハジに言った。「彼女にこう伝えなさい。『ほんとうに、あなたはこのように、私たちのことでいっしょうけんめいほねおってくれたが、あなたのために何をしたらよいか。王か、それとも、将軍に、何か話してほしいことでもあるか。』」彼女は答えた。「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております。」エリシャは言った。「では、彼女のために何をしたら良いだろうか。」ゲハジは言った。「彼女には子どもがなく、それに、彼女の夫も年をとっています。」エリシャが、「彼女を呼んで来なさい。」と言ったので、ゲハジが彼女を呼ぶと、彼女は入口のところに立った。エリシャは言った。「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになろう。」彼女は言った。「いいえ。あなたさま。神の人よ。このはしために偽りを言わないでください。」

しかし、この女はみごもり、エリシャが彼女に告げたとおり、翌年のちょうどそのころ、男の子を産んだ。

昨日、岡谷の家庭集会である年配の方に会いました。(S 兄弟によると、九十歳から年配になるそうです。(笑)) ですから今日の集いは、「若者の集い」でございます。(笑) この年配の方は九十六歳です。非常に元気で、きちんときれいな洋服を着て待っていたのです。結局、非常に心開いたのです。どうしてかと言いますと、義理の息子のおかげでしょう。息子の彼は、四十歳頃に脳溢血で倒れて、体が不自由になりましたが、長い間伊那の集会まで来ていたのです。しかし最近それも不可能になり、今は寝たきりで六十何歳かですが、酸素吸入も必要です。地上生活の時間がいつまで残されているか分かりません。話すこともできません。けれど喜んでいます。この義理の息子がどうしてそんなに喜んでいいのか。「やはりこれは本物だ。私も欲しい」。彼女(九十六歳)がそういう気持ちになったのです。昨日交わった時、本当に楽しく、嬉しかったです。

もうひとり近所の奥さんも見えました。この方も、やはりまだ年配になっていません。六十九歳くらいです。(笑) 末期の癌なのですけれども、お二人は本当に素直に祈って、「死は終わりではない。死んでから、身代わりに死なれたイエス様といっしょになることは最高だ」と思うようになったのです。……以上は、岡谷の集会の報告でした。

今日は、続いてエリシャについて考えたいと思います。『なお深く主を知らん』という題名です。おもにこのシュネムの女とエリシャについて考えたいと思います。

預言者エリシャの生活はいよいよ偉大になってきます。エリシャは靈的に非常に墮落していた時代に生きていました。形式的な集まりはありましたが、内面的な力を失った時代に主から召された人々、特別に召された人々は、預言者と呼ばれました。この預言者たちだけは主のみこころを知っており、それを実行し、またほかの人々にそれを告げ知らせた人々でした。預言者が語るなら、それは主なる神がお語りになるのです。預言者が行なうなら、主がなさるのです。

このような預言者であるエリシャが、ある日シュネムにやって来ました。そしてそこにいたひとりの婦人に招かれたのです。9節を読むと、その女はエリシャを、普通の人ではない預言者であると認めたことが分かります。女は預言者の話すことは主のお話しになることであり、預言者の行なうことは主なる神のなさることであることをよく知っていたのです。この女は、預言者を通し主をよりよく知りたいという願いをもっていました。

主を知るようになった者はだれでも、主をよりよく知りたいという心からの願いをもっているはずですが、イエス様をもっともっと知りたいと思うことは、救われたことのしるしです。

この婦人は、いかにして主を学んだのでしょうか。また私たちはどうしたら主イエス様をよりよく知ることができるのでしょうか。

列王記・第二 4章9節

女は夫に言った。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。」

エリシャは、しばしば客としてこの家に入ったことがあったようです。女は、預言者のことば、すなわち「主のみことば」を聞いたかったからです。結局、聞く耳をもっていたのです。彼女は、自分の家を預言者のために提供したばかりではなくて、自分の心を主に向かって開いたのでした。

ヨハネ伝の中で書かれています。「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネの福音書 1:12)」とあります。イエス様を受け入れた者はみな、例外なく神の子どもです。

けれどこのように救われ、新しく生まれた者には、食べ物が必要であり栄養が必要なのです。新しく生まれた子どもは栄養を取らなければ死んでしまいます。新しく生まれ変わった人々も、同じように栄養を取らなければなりません。

私たちは、どのようにして、何によって新しい栄養を取ることができるのでしょうか。どのようにして、イエス様をよりよく知ることができるのでしょうか。勝利に満ちた生活の秘密はいったいどこにあるのでしょうか。

まず、静思の時をもつことによって、私たちは心の栄養を取ることができ、イエス様をよりよく知ることができ、静思の時間によって勝利の生活を獲得することができます。

詩篇の作者は次のように告白しました。

詩篇 90篇14節

どうか、朝には、あなたの恵みで私たちを満ち足らせ、私たちのすべての日に、喜び歌い、楽しむようにしてください。

毎朝、イエス様といっしょにいる静かな時をもっているのでしょうか。救い主イエス様に、一日の最初の時をささげているのでしょうか。イエス様は朝の静思の時を通して、その日一日の心の糧を与えたいと望んでおられます。聖書を開いて「主よ。語ってください」という態度を取ることこそが、もっとも大切ではないでしょうか。

朝みことばを読み、食べ、聞き、自分のものにし、祈り、静思の時を持たなかった一日は、間違いなく敗北の一日です。もし主が静思の時間を通して力を与えることがおできにならないならば、悪魔に立ち向かうことはできません。もしその状態ならば、ちょうど襲い来るタンクすなわち戦車に泥をぶつけて立ち向かうようなものです。何というあわれな状態でしょう。そして聖書の教えは良いけれど、実際生活に当てはまらないと不平をこぼすことでしょう。朝ごとに主が私たちにお会いになり私たちを力をお与えになったならば、いかなる悪魔の軍勢でも逃げ去ります。

旧約聖書を読むと、イスラエルの民が主に近づく時、いつも祭壇を通過してから聖所に入ったことがわかります。この祭壇はイエス様の十字架を象徴しています。私たちも朝ごと

に主の御前に歩み出る時、必ず十字架を通過して行かなければなりません。これは何を意味しているのでしょうか。

祭壇の上では毎日、いけにえの全部がささげられるのです。十字架は同じように、すべてをささげた場所です。毎朝イエス様に言ひましよう。「私の両手、両足、目、舌、耳、意志、感情、理解力、これらすべてを、主よ、あなたにささげます」と。

私たちが束縛から解放してくださったイエス様に対し、毎朝感謝をささげているのでしょうか。私たちは今日も血潮の力が、自分のあらゆる罪を洗い聖め、守ってくださることを感謝しようではありませんか。もし私たちがこの流された血潮を感謝するならば、私たちの信じたとおりになります。イエス様は、古い着物を脱がせ、新しい救いの衣を着せてくださいます。もしそうなら、聖所に入ることができ、聖なる主なる神の御前で礼拝することができ、また、すべての人のためにとりなすことができるのです。主のご臨在のうちに主のご栄光と力を見ることができ、主を礼拝せざるを得なくなります。

もし私たちが毎朝、何よりも静思の時間を大切にして過ごさなければ、私たちは悩みと苦しみだけが見えて、主のご栄光は本当に小さなものになってしまいます。イエス様だけを見る代わりに人間の環境だけが目に入ります。

私たちはどうしたらイエス様をもっとよく知ることができるのでしょうか。それは今話しましたように、朝の静かな時によってです。飢え渴きをもってみことばを読まない人は損をします。もし聖書を読まなければ、祈りが止まり、主のみこころを知ることができません。

私たちのたましいはみことばに飢え渴いているのでしょうか。それとも満腹しているのでしょうか。イエス様は、「わたしはいのちのパンである」とおっしゃいました。パンは、見て驚くために博物館の中に飾られているものではありませんし、またそうしておいてよいものでもありません。食べなければ何の役にも立たないものです。

私たちの「霊のないのち」は、この「いのちのパン」を食べるはかりにしたがって、成長します。いのちのパンであるイエス様ご自身が、私たちの食べ物とならなければいけませんし、またイエス様ご自身はそうなりたく、私たちの心の奥底に入ることを願っておられます。

いったいどうしたらイエス様をもっとよく知ることができ、理解することができるのでしょうか。イエス様のみことばによってそれができます。

どこで、どのようにして、私たちは主を見出し、主をよりよく知ることができるのでしょうか。ただ主のみことばのうちに、また主のみことばによってのみ、主を見出すことができるのです。主をよりよく知ることができるのです。

聖書は、学問のために書かれたものではありません。新しい真理を打ち立てるために書かれたものでもありません。「神の呼吸」だそうです。主なる「神の息」です。すなわち、主はご自身をこのみことばによって、みことばで包んでみことばにご自身を含んで現わされているのですから、私たちはその「みことば」と、「イエス様」を、「いのちのパン」と

して食べなければなりません。食べるなら味がするはずで、食べるなら消化してその結果、力が与えられます。食べるならそれは私たちのからだの一部分となり、そうすることによって栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていくのです。一日の最良の時にこのいのちのパンを食べるために用いましょう。

私たちはイエス様ご自身により、「生けるいのちのパン」によって生きる者になりたいものです。静思の時間に、私たちは主の御声を聴くために聖書を読みます。主の御声を聴いたなら、それに関する応えとして私たちは祈ります。聖書を読むだけでは十分ではありません。みことばを通して主は私たちに語ろうと思っておられ、そして祈ることによって私たちは応えます。ある兄弟姉妹はほんの少しだけしか聖書を読まず、主の御声を聴くことをしません。また少しのことばで少ししか祈りませんので良心にやましいところがあります。

イエス様は、私たちとの交わりを求めておられます。これをよく心に留めましょう。イエス様は私たちを求めておられます。イエス様は、私たちに聖霊をお与えになりました。そして、私たちを愛し、私たちに会うことを心から願っておられます。

これらのことを意識していつも主の御前に出ましょう。そうするなら、私たちはイエス様を「主」として、「友」として、また「花婿」として、よりよく知ることができるのです。

シュネムの女にとって、預言者のことばすなわち「主のみことば」は、すべてでした。私たちにとっても、「主のみことば」ほど、大切なものはありません。「主のことば」ほど、私たちの助けとなるものはありません。主のことばは私たちにとって両刃の剣とならなければならぬ、とヘブル書4章12節に書いてあります。

ヘブル人への手紙 4章12節

**神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。**

「主は生きておられる」。「主のことば」も生きておられます。主のことばは単なることばではなく「いのちのことば」です。

申命記32章。モーセがイスラエルの民に向かって言ったことばです。

申命記 32章47節前半

**これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。**

もし、私たちが「主のみことば」を受け入れ、私たちのうちに働いていただける備えをするならば、私たちは幸いであると思います。テサロニケの人々は、この「主のみことば」によって救われ、元気になり、はっきりとした人生の目的をもつようになったのです。

テサロニケ人への手紙・第一 2章13節

**こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事**

実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

イエス様は祈りの中でお語りになりました。「あなたのみことばは真理です」と。このイエス様と同じ態度を取る者は祝福されます。理解できるかどうかは問題ではありません。「あなたのみことばは真理です」。

よく知られている個所なのですが、エレミヤは、「私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました」と。理解できたかどうかではありません。関係ありません。「主のみことばですから、間違いなく真理です」。エレミヤはこの態度をとったので、事実として経験しました。すなわち、

エレミヤ書 15章16節

あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

つまり、喜ぼうと思えばみことばを食べなさい。必ず元気になります。主の語られたことばが、聖書に書き記されるようになったので本当に感謝します。この書かれたことばに頼ることが大切なのです。

ヨハネ第一の手紙5章13節を読むと、ヨハネは当時の信じる者に、次のように書き記したのです。

ヨハネの手紙・第一 5章13節

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

本当は「確信する」ためです。「確信の土台」なるものは、「書かれているみことば」です。自分の気持ちではありません。

ダビデは、

詩篇 119篇162節

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

とすることができたのです。

詩篇 119篇49節、50節

どうか、あなたのしもべへのみことばを思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。

ダビデの告白です。

詩篇 119篇76節、77節

どうか、あなたのしもべへのみことばのとおり、あなたの恵みが私の慰めとなり

ますように。私にあなたのあわれみを臨ませ、私を生かしてください。あなたのみおしえが私の喜びだからです。

詩篇 107篇20節

主のみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。

とあります。

みことばを読む目的が大切です。単なる知識を得るためではなく、心から真剣に真理を求めていくという飢え渴きをもつことこそ大切なのです。聖書は主なる神のみことばですから、私たちはみことばを主のことばとして学び、主のことばとして素直に受け入れることが大切です。

私は、聖書を読んでいる絵を持っています。ひとつの絵ですが、本当はその中に四枚の絵も入っています。

- ・一枚目の絵を見ると、大きな人がちっぽけな聖書を読んでいます。
- ・二枚目の絵になると、その大きな人は急に少しだけ小さくなり、その代わりに、小さな聖書は前よりもずっと大きくなっています。
- ・三枚目の絵を見ると、その人は前よりもさらに小さくなり、聖書はその人と同じように大きいものになってしまいました。
- ・四枚目の絵を見ると、その人は非常に小さくなり、それとは反対に聖書は比較にならないほど大きなものになりました。

これで分かることは、初めは自分の考えによって聖書を解釈していた人が聖書を読むうちに、聖書が絶対的権威を持つに至ったということです。つまりこの人は聖書を主のみことばとして真剣に読み、このみことばに耳を傾け注意して聴いたので、みことばがその人の血となり肉となって、自分の思いが消えてしまったのです。その結果みことばがすべてとなり、イエス様がますます大きくおなりになったということです。

こんにち多くの人は、みことばを軽く考えて自分の考えで勝手に解釈したり、みことばに対して耳を傾けることをしなくなってしまいました。何十年か前まで大変だったことは、その「聖書批判」でしたが、もうその時は過ぎ去りました。聖書なんてあってもなくても関係なく、みんな自分勝手なことをすればいいだろう。何が正しいか正しくないかだれも分らない。そういう雰囲気なのです。つまり滅びに向かっているということです。

みことばに頼ろうとしない国は必ずのろわれます。今現在、みことばに頼る国はひとつもありません。これこそ悲劇的です。アメリカは、以前は良い国でした。どうしてこの国ができたかといいますと、大部分はヨーロッパから逃げてき人々だったのです。「みことばに頼ることができなくなり、迫害されてしまったので、『主を第一』にするため、アメリカに行こう」と。今は、大部分のアメリカの学校の中でも、「公に祈ってはいけない」ということになっています。悲劇的です。従軍牧師でさえも、イエスの名によって祈ってはいけないとなっているのです。いったいどういうことになってしまっているのでしょうか。

けれども、イエス様のご再臨は近いのです。目に見える世界がダメになればなるほど、私たちは「もうちょっとで再臨」と考えると、やはり嬉しくなります。

みことばこそが大切です。みことばを正しく読もうとするなら、聖書のみことばにこそ、「絶対的な権威」を認めなければなりません。聖書というものは決して研究するためのものではなく、主が私たちに語りかけてくださるみことばですから、私たちは注意深く聴かなければなりません。主のみことばを聴きそれに従う時に、ローマ書10章17節のみことばを体験できます。

ローマ人への手紙 10章17節

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

聖書に書かれている事がらを「絶対的な権威を持った主のみことば」として受け入れ、それに耳を傾けようとしなない者は、決して生き生きとした信仰をもち得ません。

みことばを読む本当の目標は、「主イエス様を知り」、「生きて働いておられるイエス様に出会い」、そして「イエス様を受け入れる」こと。また、「イエス様をよりよく知ること」であるべきです。

いったいどうしたら、イエス様をよりよく知ることができるのでしょうか。みことばによってです。「聖書は主のことば」です。「みことばは、主なる神の啓示そのもの」です。すなわち、単なる教理、学説ではなく、主の啓示そのものです。当時の聖書学者たちの多くは、そうではないかと思っただけなのですが、でも真剣になろうとしませんでした。

ヨハネ5章の39節を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 5章39節、40節

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」

聖書を読むことと、いのちを得ることは、ひとつのことであり、決してふたつのものではありません。ですからモーセは、

申命記 32章47節前半

「これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。」

と。

主はみことばをもってご自身をお現わしになります。「主のみことばは私たちにとっていのちのパン」とならなければなりません。なぜなら、聖書は教理や真理の原則を語っているのではなく、「いのちのパンそのもの」であるからです。イエス様は、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。(マタイの福音書 4:4)」と言われたのです。

イエス様ご自身は、私たちがそれによって生きる「いのちのパン」となりたく思っておられます。私たちはイエス様によって生きているのでしょうか。私たちは主のみことばによって生きているのでしょうか。

ヨハネの福音書 6章63節

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」

みことばは、「主ご自身を啓示する」のです。「みことばを食べる」ことは、いのちを得ることを意味しています。「生けるみことば」が私たちのうちに入ると、必然的な結果として、いのちが生まれます。理解力をもってしては、決していのちは訪れて来ません。もし聖書が私たちにとって単なる掟であり、また真理であるならば、それは自分にとって重荷であり不自由なものです。けれど、「いのち」ならば、自由と喜びをもたらすものです。

一日の最良の時を、この「いのちのパン」を食べるために用いましょう。

詩篇 119篇の中で、ダビデはよく、そのみことばの大切さについて証したのです。

詩篇 119篇72節

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

97節

どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょうか。これが一日中、私の思いとなっています。

140節

あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。

第二列王記4章に出てくる女は、預言者のために特別な部屋を作りました。彼女の心は主のことばに対して開かれていました。彼女は主のことばを聞きたいと思い、主をもっともっとよく知りたい、と願ったのです。そうするために彼女は預言者のために部屋を作りました。すなわち、「神のみことばをもたらす人」のために部屋を設けました。主のことばが彼女のうちに入り込む余地ができたのです。

シュネムの女は、裕福で、非常によい地位をもっていました。そして彼女は、主なる神ご自身をよりよく知りたいと思いましたので預言者を招きました。一見彼女には何の悩みも苦しみも無いかのように見えたが、実は彼女の心にただひとつ悩みがあったのです。彼女はすべてを持っていましたが、「本当に意味のあるもの」「大切なもの」を持っていなかったのです。すなわち子どもがなかったのです。

16節の、「このはしのために偽りを言わないでください」ということばの意味は、私はただひとつの願いを持っていました。それは、子どもが欲しいという願いでした。けれどそれはもうまったく不可能なことなので私は諦めました。それは非常に苦しい戦いでした。しかし、答えがないので今はもう諦めています。どうぞこのことについてはもう話さないでください。あなたがそれを話すとまた以前の苦しみが始まりますから、という意味です。

しかし、エリシャは彼女に「来年の今頃あなたはひとりの子を抱くでしょう」と言ったのです。そして、この預言は実際に成就されました。すなわち、女はついにみごもって、エリシャが彼女に言ったように次の年のその頃に子を産んだ、と書いてあります。

預言者が語るならば、それは主がお語りになるのです。もし、預言者が約束するなら、それは主が約束されるのです。そして、主の約束は必ず成就します。

私たちもこの女と同じように、毎朝聖書を読む時間を持ち、主のみことばを受け入れ、心の余地を主にお渡しするならば、同じように不可能を可能とする奇蹟を経験するようになるに違いありません。そしてひとりひとりが持っている心の深い傷も癒され、また深い悩み苦しきも消え去るでしょう。

この女が子どもを得たときは、きっと嬉しくて嬉しくてしかたがなかったに違いありません。この子どもが女の小さな偶像になったかどうかは知りません。この女が与えられた子どもより与えてくださった主を愛したかどうかも分かりません。どちらにしても、この子どもが突然死んでしまったのです。この出来事は女にとりどんな苦しみだったでしょう。母はこの子を預言者の寝台の上に置きました。彼女はこの苦しみにより、もっともっと主をよく知るようになったのです。

私たちが困難を通して主をよりよく知るためには、次の三つのことを知っていなければいけません。

\*一番目。まず女は、神の人である預言者のところへ行きました。

主のことばを語る預言者のところへすぐ行きました。彼女は自分の夫のところへ行ってもその苦しみを告げませんでした。まず預言者のところへ行きました。彼女は家で泣き続けているようなことはせず、できるだけ早く主の召し使いエリシャのもとにやって来ました。私たちの場合はいったいどうなのでしょう。私たちは悩みをもっているとき、いったいどうするのでしょうか。すぐに主のみことばに目を向けるのでしょうか。罪を犯したときにその罪の水たまりの中にいつまでもいるのでしょうか。それとも、すぐに起き上がって主の御前に出るのでしょうか。もし多くの困難が群がり起こった場合、私たちがそれに対して示す反応はいったいどのようなものでしょう。

女は直ちに神のみことばを語る人のところへ行きました。問題をもつと、だれでも悩みます。そしてどうすればいいか分からないので専門家のところへ行こうと思う人が何と多いのでしょうか。けれど、まず為すべきことは祈ることです。主のみこころを尋ねることです。確信を得ることです。

\*二番目。女は預言者のところへ来るや否や、身をかがめて願いました。

私たちが悩みの中でもっとよく主を知ろうとする場合は、絶えざる心からの熱心な祈りが必要です。彼女は自分の悩みを隠さずに公に話しました。福音書の中には、彼女の親戚らしい人について書いてあります。女は恐れおののき、自分の身に起こったことを知り、イエス様の前に出てひれ伏し、イエス様に真実を余すところなく打ち明けました（マルコの福音書 5:33）。

私たちが自分の苦しみを公に話そうとする時、悪魔がやって来ます。第二列王記の4章

27節に書かれているゲハジのように、そうさせまいと押しのけようとしています。

列王記・第二 4章27節

それから、彼女は山の上の神の人のところに来て、彼の足にすがりついた。ゲハジが彼女を追い払おうと近寄ると、神の人は言った。「そのままにしておきなさい。彼女の心に悩みがあるのだから。主はそれを私に隠され、まだ、私に知らせておられないのだ。」

女は悩みを自分で処理しようと思わずに、すぐに預言者のところへその悩みを持って行きました。

\*第三番目。女は神のことばを話す人から離れませんでした。

列王記・第二 4章30節

その子の母親は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」そこで、彼は立ち上がり、彼女のあとについて行った。

私たちが困難のうちに主をよりよく知ろうとするなら、「確固たる信頼」が必要です。「私は決してあなたを離しません」と書いてあるとおりです。「私を祝福してくださらなければ、あなたを去らせません（創世記 32：26）」という揺るぎない心構えをもって主の御前に出るならば、奇蹟を見ることができるのです。

そして、このような人々だけが、困難の中にあって主をよりよく知ることができるのです。

了